

## グラスゴーの友

安藤 晃二

グラスゴーが賑やかだ。ロンドン駐在の 70 年代後半、この町が絡む忘れ難い思い出がある。rabbit hut 発言のサッチャー首相は公社群の民営化に大ナタを振るい、フォークランド紛争の軍事制圧が国威をいや増した。軌道に乗った北海油田開発が経済回復を助ける。

油田開発の生産設備やパイプライン建設に BP、シェルに加え米国メジャーも参入、超低温用品質で世界を寄せ付けない鋼材供給では日本勢間の熾烈な競争が展開する。その最中、鉄の女の一声「油田開発用資材の全ては英国産品使用」なる要求。青天の霹靂ではあったが、思いがけない解決を見る。国産化政策による英国大鉄鋼メーカー BSC 社への鋼材発注は、そのまま日本業界に転注され、以前同様日本から輸出が続く。しかも、供給ルートは平和裏に調整された。斯くして私は BSC の厚板の本拠地、スコットランドのグラスゴーへ出入りすることとなる。その昔、グラスゴーのクライド川沿いの造船所は世界に戦艦を送り出した工業都市である。定年間際の BSC 側の担当者 F 君とは毎回パブでビール一杯の仲となる。

米国メジャー C 社のリグ建設ヤードはハリス島に、オフィスはロンドンにあった。あろう事か、日本からの厚板の納期が二週間も遅延状態。外出先より会社に電話をいれる。待っていたとばかり秘書のシルヴィア、「アンディ、大変。C 社のロンドンの GM が、今晚のフライトと東京のホテル予約を取れと、怒鳴ってる、困ったわ」。一晩待って貰い、翌朝 F 君がグラスゴーから飛んで来た。その足で、雁首揃えて、顔も見えないほど大きな靴底を見せ机の上に足を組むジョンウェインの前にひれ伏した。F 君はと見れば、責任は我にありとばかり、滂沱の汗を拭いつつ執り成しに努め、この間一度たりとも日本側を指さすことはなかった。契約当事者の矜持に満ちた立派な態度であった。「一日でも早めてくれ」GM の日本行きは止まった。

帰り道ロンドンのパブで F 君とビターを酌み交わしたことは云うまでもない。スコットランド訛が堪らない。